

プロジェクト研究における倫理・規範

Ethics and Standards in Project Study

寺谷 愉利子¹⁾ 山崎 瞳²⁾

TERATANI Yiriko YAMASAKI Hitomi

東郷 多津³⁾ 望月 紫帆⁴⁾

TOGO Tazu MOCHIZUKI Shiho

¹⁾ 佛教大学大学院 ²⁾ 佛教大学

³⁾ 京都ノートルダム女子大学 ⁴⁾ NPO 法人学習開発研究所

¹⁾ Bukkyo University ²⁾ Bukkyo University

³⁾ Kyoto Notre Dame University ⁴⁾ Institute for Learning Development

〈あらまし〉 ILD は「ボロ - ニャ・プロセス - 協調と自律の生涯学習社会への道」を参考として、「協調、自律、責任」をキーワードに「教える教育」から「学ぶ教育」を目指している。学問分野の異なる大学教員は、ILD 主催のプロジェクトでチームを組織して協調自律学習の開発に取り組んでいる。博士候補生や研究者によるこの学際的プロジェクト研究においても、「協調、自律、責任」は重要である。プロジェクトメンバーは各自研究目標を定め、プロジェクト活動は拡大・発展している。そしてこの活動を経て、「プロジェクト研究を行うための倫理・規範」を検討しているので報告する。

〈キーワード〉 生涯学習、協調自律学習、プロジェクト研究、倫理・規範、ネットコミュニケーション

1. はじめに

本稿研究者は学問分野の異なる大学教員であり、NPO 法人学習開発研究所（代表：西之園晴夫、以下、ILD と略称）が主催するプロジェクトでチームを組織し、協調自律学習の開発¹⁾に取り組んでいる。ILD は、「ボロ - ニャ・プロセス - 協調と自律の生涯学習社会への道」を参考として、「協調、自律、責任」をキーワードに「教える教育」から「学ぶ教育」を目指している²⁾。

一方 EUA では、ボロ - ニャ・プロセスの「高等教育」の対象者を、大学生だけでなく博士候補生による学際的なプロジェクトを推奨している³⁾。

我々のような博士候補生や研究者による学際的プロジェクト研究においても、「協調、自律、責任」は重要である。2 年間のプロジェクト活動を経て、「プロジェクト研究を行うための倫理・規範」を検討しているので報告する。

2. プロジェクトの紹介

我々は 2006 年に、佛教大学大学院の修士・博士課程の西之園ゼミ関連で集まり、「質的研究勉強会：GQR Glossary of Qualitative Research」を始めた。そして 2 ヶ月毎の face to face 会議(off-line communication：オフ会)対面コミュニケーションによるオフ会と、ネットコミュニケーション(on-line communication：Action T.C、Skype)を使って、質的研究の学習会、授業研究そして授業

設計にプロジェクトチームで取り組んでいる。

そして 2007 年に、英語の自律学習の開発⁴⁾、プロジェクトコミュニケーションツールのログ分析⁵⁾、看護大学における協調自律学習の可能性⁶⁾等、研究成果を紙面で発表した。プロジェクトメンバーは、それぞれがエフォートレベル(表 1)を表明して研究発表に参加した。

表1 エフォートレベル

3	コアで開発・分析メンバーとして参加。開発・分析のどちらもが求められる。メリットは学会(or 学術論文)発表の著者欄に参加。効率的に業績ポイントを稼ぐことが可能。
2	ときおりサポート(入力作業など)が可能。発表で連名しなくても OK。
1	今回は無理。

プロジェクト研究は順調で、メンバーは脱会することなく(5 名 + 1 名：長期海外研修中)それぞれが研究目標を定め、プロジェクトは拡大・発展している。しかしこの間、メンバーおよびプロジェクトに葛藤があった。その内容は、医療と教育の学際間の研究倫理の温度差、メンバーの大学業務あるいは学際間の考えの相違などによるドロップアウト、そして科研申請などであった。

看護大学教員である発表者はプロジェクトで葛藤を多く経験したことから、「研究者のコラボ方法」について中心的に取り組むことにした。

3. 用語、プロジェクト名称の定義

倫理・規範の用語定義：チームとは多様な人が集まって一つの成果を生み出すことを目指しているため、チーム内での仕事を分担する必要があるため、チームでは規範（モラルやルール）が必要である⁷⁾。さらにプロジェクト研究ではそれぞれの機関での研究倫理が求められ、意思表示手段として C-Learning を使う場合は情報モラル（ルールとマナー）も考慮に入れなければならない。本稿では、「倫理・規範」とは研究・情報モラル（倫理規範）と役割のルール（行動基準）を意味する。

プロジェクト名称：プロジェクト開始当初 ILD の「GQR」としてチームを組織したが、最近 ILD の研究所の事業変更があり、プロジェクトチーム「GQR」は「強調自律学習」「実践的研究の方法に関する学習会」に分化した。本稿の「研究者のコラボプロジェクト」は両者を包括する。

4. 「研究者のコラボ方法」のアンケート

2008 年 3 月、5 月に「研究者のコラボ方法」についてプロジェクトメンバー 5 名にアンケートを行った。そのねらいは「コミュニティ活性に欠かせない方略作成の枠組みの明文化」である。アンケートの内容は、「日本心理療法研究所倫理要領 草案」⁸⁾を参考に作成した「1. 倫理規範、2. 行動基準」と「3. 意見」について、2 回紙面議論した。

「研究者のコラボ」のルールと規範（表 2）は、未完成である。「プロジェクト運営について（「行動基準」に伴う役割責任など）」は今後検討を要し、各分科会のメンバー間の合意が必要である。最終版は ILD で掲載する予定である。

多くの機関では「倫理・規範」の類は最近制定され、改定版の Web 掲上は見当たらなかった。「コミュニティ活性に欠かせない方略作成」としての「倫理・規範」とくに「行動基準」はプロジェクトが変化する都度作成する必要がある。

プロジェクト運営の葛藤の要因として、1. 研究発表時に各自が表明するエフォートレベルとメンバー規範、2. プロジェクト運営の暗黙の役割、3. 学際間の垣根、4. 研究業績（研究ライバル）が挙げられる。

5. まとめ

学際的プロジェクト研究に参加する博士候補生や研究者は、自己の能力開発の研鑽を望んでいる。チームに個を生かす学習のあり方、チーム学

習と個人学習を統合した学習の実践、そして博士候補生や研究者の自己開示を引き出すことのできる「研究者のコラボ」のルールと規範（倫理・規範）」の作成は有効である。

表 2 「研究者のコラボ」のルールと規範」案（未完成）

<p>1. 「研究者のコラボ」における倫理・規範」について</p> <p>1) 倫理・規範とは、メンバーとして実践すべき基本的憲章とも言える普遍的なルールである。</p> <p>2) 前提：「メンバーとしての作業」は「研究者のコラボ」の実験事例としての生データとなる。メンバーの了解により研究倫理上の問題をクリアする。</p> <p>3) 人権と人間的尊厳の尊重 すべての人々の基本的な人権、人間としての尊厳を尊重し、そのプライバシーの守秘性と自己決定権を尊重する。特に研究対象となる者に対して、常にその人間的成長と健康を中心に考えた行動をとる。</p> <p>4) 社会的責任 自らの行為の社会性を認識し、自らの行為が常に他者の存在に支えられていることを自覚し、自らの行為が自らと他者の双方の幸福を促すよう最善の努力を図る。</p> <p>5) 専門家としての自覚 その与えられた職域の専門性と限界を自覚し、専門家としての自らの見識と技能を常に高める努力をし、専門家としての責任を果たす努力を惜しまない。</p>
<p>2. 「研究者のコラボ」における行動基準」について</p> <p>1) 「行動基準」とは、「倫理規範」を様々な活動の中で具体化していくうえでガイドラインとなる。今後、活動別に詳細な倫理コードを設定していく必要がある。</p> <p>2) 前提：プロジェクト活動は、ネットコミュニケーション（on-line communication：Action T.C、Skype）と face to face 会議（off-line communication：オフ会）で合意形成をしながら、研究（学習）活動をしている。</p> <p>3) プロジェクト運営に関して（「行動基準」に伴う役割責任など）</p>

文献

- 1) 西之園晴夫、宮田仁、望月紫帆(2006)「教育実践の研究手法としての教育技術と組織シンボリズム」教育実践学研究 8(1)、日本教育実践学会
- 2) ILDホームページ - 海外調査資料(ポローニャ・プロセス) <http://www.u-manabi.org>
- 3) EUA PUBLICATIONS 2005:REPORT ON THE EUA DOCTORAL PROGRAMMES PROJECT 2004-2005
- 4) 東郷多津、他(2007)「英語を学習する意味が見いだせない学習者のための自律学習の開発(3)」日本教育実践学会
- 5) 高橋朋子、他(2007)「プロジェクトチームによる授業方法の改善～コミュニケーションツールのログ分析～」日本教育工学第23回全国大会
- 6) 寺谷愉利子、他(2007)「看護大学における協調自律学習の可能性」日本教育実践学会
- 7) 西之園晴夫(2007)『学習ガイドブック 教育の技術と方法』ミネルヴァ書房
- 8) 日本心理療法研究所倫理綱領 草案、http://shinri.co.jp/jip_info/rinri.html